

編集後記

コロナ禍の下、私たちは新しい生活様式を求められている。これは大学教員も同じだ。今年度前期は、非対面授業の中で、遠隔授業の準備とスキル習得に忙殺された。学年歴が大きく変わり夏休みはほとんどなかった。後期から多くの授業が対面式になったが、教室における三密に気を遣い、教室の換気を行ない、プリントは一枚ずつ教員が手渡しをし、いつ非対面授業に切り替わるかわからないと身構えながら授業を行っている。マスクをしながら長時間しゃべるのはきつい。入試については文科省からは追試を実施するようにお達しがある。あれもある、これもある…。すべては愚痴であり、言い訳だが、そのような次第で研究にエネルギーを振り分ける余裕がなかった。おそらく多くの教員も同様だろう。本来は年に二度出すべき『国文学雑誌』だが遂に前期は出すことができなかった。残念でならない。

後期になって103号を世に出すのは、他の書き手はどうかかわらないが、私個人としては研究者としての矜持、というより、もはや意地である。

書き続けること、研究をつづけること、研究雑誌を世に出し続けること、もっと広く言えば何かを継続すること。このような非常時にこそそれが試されているのだと思う。(揚妻)

二〇二〇年十二月二十五日 印刷
二〇二〇年十二月三十一日 発行

藤女子大学 国文学雑誌(第103号)

定価 五〇〇円

振替 〇二七〇〇一四一六八〇七番

編集人 揚妻祐樹
発行人

札幌市北区北七条西一丁目

発行所 藤女子大学日本語・日本文学科学研究室内

藤女子大学日本語・日本文学系

印刷所 札幌市中央区北六条西十五丁目

㈱491アヴァン札幌